様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０８４８

研究課題名（和文）西国巡礼者に関する基礎的データの整理と検討――乗寺巡礼札のデータベース化―

研究課題名（英文）Organizing and Analyzing the Basic Data of Saikoku Pilgrims: Compiling a Database of the Tags of Ichijo-ji

研究代表者
幡鎌　一弘（HATAKAMA, KAZUHIRO）

天理大学・付属おやさと研究所・教授

研究者番号：５０２７１４２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円、（間接経費）　　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：　兵庫県加西市にある西国三十三所札所法華山一乗寺の巡礼札を悉皆調査した。その結果、約28000枚の札が保管されていたことが明らかになり、従来、国単位での納札の地域分析を、村単位で把握できるようになった。たとえば、武蔵国・下総国からの納札が多いとされていたが、実際には武蔵国東部と下総国西部（熊谷周辺を限りとしておおむね中山道から江戸川の間の地域）に限定されること、西日本からの巡礼者は、萩・長崎などの港町からくるという共通点があることが示された。

研究成果の概要（英文）：We investigated all pilgrimage tags of Ichijo-ji Temple in Kasai City, one of the thirty-three Kannon temples in Western Japan. After the investigation, it was revealed that approximately 28,000 tags were kept. Furthermore we conventionally analyzed regionals of pilgrimage tags by the unit of province, we came to be able to analyze them by the unit of village. For example, it was said that there were many pilgrims from Musashi Province and Shimousa Province, but the fact of the matter is that it was limited to eastern part of Musashi Province and eastern part of Shimousa Province (the area among Kumagaya and Nakasendo and Edo River). The pilgrims in western Japan had the common denominator that they came from the port town such as Hagi, Nagasaki.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：巡礼　西国三十三所　一乗寺　納札　近世史　宗教史　民俗学　納経

１．研究開始当初の背景

兵庫県加西市にあり、西国三十三所札所である法華山一乗寺の巡礼札の調査は、前田卓『巡礼の社会学』（関西大学経済・政治研究所、1970 年）と稲城信子「順礼札からみた西国三十三所信仰」（浅野清代表『西国三十三霊場寺院の総合的研究』中央公論美術出版、1990 年）で報告され、一乗寺本堂に打ち付けられていた巡礼札が、日本最多の 11,000 点程あることはすでに知られていた。2000 年に始まった本堂の解体修理に伴い、稲城信子と幡鎌が加西市史の調査の一環として悉皆調査を手がけ、稲城信子を代表者として平成 17 年度～20 年度科学研究費基盤研究（B）『兵庫県加西市・一乗寺の歴史資料（巡礼札）の調査とデータベース化』の採択を受け、調査を続行した。その結果、全体数として約 28,000 点であること、納札の地域分布の傾向は前田・稲城の指摘と大きな違いはないこと、天井に打ち付けられた時期には場所によって違いがあること、札以外にも多様な奉納物があることなどが示され、その文化財としての価値が非常に高いことが明らかになった。しかし、その数は予想をはるかに上回り、データとして調えるところまで至らなかった。また、稲城がそれまでの職場を退職し事業を継続できなくなったため、共同研究者だった幡鎌が再度科研費を申請し、データの整理に当たることになった。

２．研究の目的

本調査の大枠および一乗寺の巡礼札の基礎的事項については、前掲の稲城信子による科研費の報告書、ならびにそれをもとに執筆した幡鎌「巡礼札からみる西国巡礼の信仰形態－天井に打ち付けられた信仰心－」（『天理大学おやさと研究所年報』第 16 号、2010 年）に取りまとめており、今回の調査・研究の目的は、10 年以上にわたって行ってきた調査に区切りをつけ、一乗寺の巡礼札のデータを完成させることにあった。日本で最大数の巡礼札のデータは江戸時代に巡礼に出た人々の情報として貴重であり、地元に巡礼者の史料が残っていなくともその情報が地域に還元できること、また、各地で行われている旅日記の研究あるいは納札のデータと重ね合わすことで、巡礼研究に厚みを加えることができるのである。

３．研究の方法

調査は、一乗寺の現地整理において写真撮影・採寸を行った後、写真をもとに調書の作成、調書のコンピューターへの入力、校正の手順で行った。別置されていた札があり、新たに調書を取った。従来と同じ調書を用い、材質・法量・形態・文字（裏表）などを記入した。現地調査では、昭和 50 年代に稲城が行った巡礼札の調書をチェックするとともに、新たにデジタルカメラで撮影した。また、劣化していた整理袋をすべて中性紙のものに取り換えた。

武蔵国・下総国からの納札が多いこともあり、国立歴史民俗博物館・関宿城博物館・埼玉県立史料館等で関東における巡礼研究の文献調査（主に旅日記や巡礼後建立された石塔類の一覧等）や情報交換を行った。

４．研究成果

巡礼札は、おおよそ 28,000 点あり、通常の札（長さ 13～20 ㎝、幅 3～5 ㎝、木・紙製）だけではなく、納経・絵馬などが数多く含まれている。さらに、本堂には、数多くの《落書》が残されていた。今回、外側からではあるが、一乗寺のその他の施設を検討したところ、国宝の一乗寺三重塔には巡礼札をはぎ取った跡や《落書》が残されており、鐘楼や経蔵にも《落書》が確認できるので、一乗寺全体で巡礼札を受け止めていたことがうかがえる。

本堂は寛永 5 年に建立されており、巡礼札は寛永 6 年から平成に及ぶ。１点ごとのデータを作成することによって多様な側面から時期的な変化や奉納地の地域的変化を読み取ることが可能になった。

たとえば、17 世紀の札は、微妙に形が異なるが、18 世紀に巡礼指南書の類が数多く出版されて、形態、書かれる願文がさらに平準化されていった。しかし、指南書に従わない地域があり、巡礼の母体となる観音講などが存在していて、巡礼の様式を規定していたことは明らかである。

地域については、従来、国を単位にして検討されてきた。しかし、必ずしも生活と密着しない枠組みでの把握には限界があり、より細かく検討することで、地域の特殊性について明らかになると思われる。すでに、肥前国については、ほぼ長崎に限定されるため、独自に取り上げられてきていた。また、山城国については、西岡と呼ばれる京都市西郊が非常に多いことも注目されていた。両地域とも、指南書とは異なった形態（絵馬型）の札を数多く納めており（写真左）、衰退したとはいえ、西岡では、現在も観音講が続いている。

伊勢国については、四日市・桑名などの商

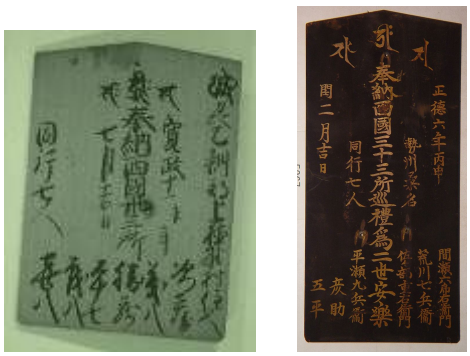

写真　山城国乙訓郡上植野村（西岡地域・左）と伊勢国桑名（右）から奉納された絵馬型の札

人が多く、金泥・銀泥で文字が書かれた大判で特殊な漆塗りの札を奉納していた（写真右）。札の残存に関しては、地域格差とともに経済格差もある。つまり、丈夫で立派な巡礼札であるがゆえに、廃棄されずに残ったのである。このことは、紙と木という材質の違いについても注意を促す。いうまでもなく、紙札は極めて残りにくく、また 19 世紀には、同じ紙でできている千社札との重なりを視野に入れ、関東からの巡礼者数の減少を検討することが必要になる。

最も巡礼札が多いのは武蔵国であることはすでに指摘されており、サンプリングとして、天井分の巡礼札約 250 か所（約 2200 枚）から武蔵・下総・常陸・下野などを抽出してみた。すると、武蔵・下総については中仙道と利根川・江戸川の間の地域、とくに日光街道沿いに集中していることが分かる（図１）。武蔵国葛飾郡・埼玉郡・足立郡、下総国葛飾郡で、関宿・菖蒲・羽生・忍・幸手・騎西・庄内・八条などの「領」としてまとまっている地域である。利根川上流では、熊谷より西側に及ぶことがなく、江戸の住人の札も今回のサンプルの中からは見いだすことはできなかった。寛永期に江戸小網町から奉納されている札や《落書》も確認されているから、江戸の住人が西国巡礼しなかったわけではない。このように考えると、巡礼札が残るということは、かなり特殊であり、巡礼札から巡礼を検討するには、いろいろな制約があることになる。

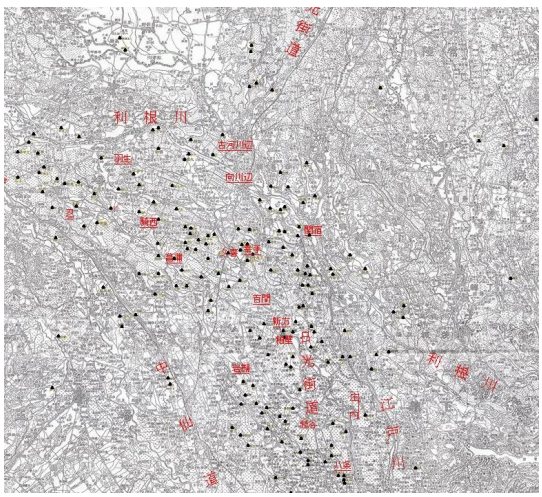

図１　武蔵国・下総国で納札の見られる村（部分）
黒点は巡礼者の村、赤字はおもに「領」を示す。

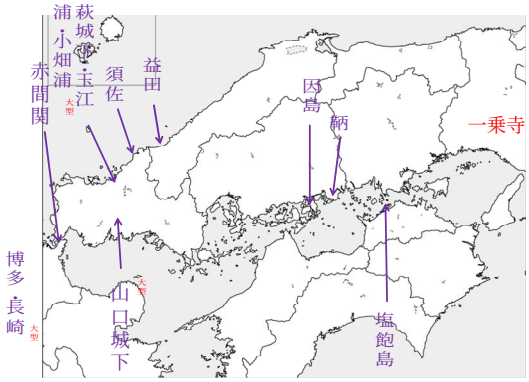

図２　西日本で納札した主要な地域

当該地域に残っている旅日記について、自治体史や収集資料の写真帳等を検討した。今のところ、納札をした人々と旅日記を残した人の重なりは確認できていないが、いずれそのような例も出てくるだろう。

一方、西日本で数が多かったのが、長門・周防両国（山口県）である。山口の現地調査は予算の関係もあって見送ったが、同県の巡礼等の研究論文、あるいは絵馬の報告書から、現地では西国巡礼に関する文献は多くはないようである。ただ、山口県下でも、一乗寺と同じような《落書》の例があることがわかった。また、大阪城天守閣の北川央から提供を受けた河内長野市の光滝寺の本堂の写真からも、長門国からの巡礼者の《落書》が少なからず見いだせた。一乗寺に巡礼札を奉納した人々そのものではないが、萩城下の地名は一乗寺と光滝寺で重なっていた。一乗寺で絵馬による納札をしていた人々が、別の場所では《落書》する習慣があった可能性が高く、ここから納札と《落書》が本来同質のものだということが示されるだろう。

長門・周防両国からの巡礼札の奉納者は確かに多いが、具体的な地名を拾ってみると、萩城下では玉江浦・小畑浦という城下でも港として機能していた場所が注目される。その東側に須佐港、さらにその東には石見国益田港があり、赤間関からも多くの奉納があり、九州では博多・長崎、瀬戸内では因島や鞆、塩飽島など港町として栄えた場所がある（図２）。近畿・東海においても、大坂・伊勢・桑名・四日市などの港はそれぞれの地域に不可欠な要素であり、巡礼者の数、奉納の習慣と舟運との関係は今後新しい論点として深められなければならないだろう。

旅日記の調査によっても、一乗寺の巡礼札がどのように打ち付けられたのかのはっきりとした記述は見いだせなかった。ある意味札を放置した一乗寺の寺院構造についても新しい論点は見いだせなかった。加西郡（現在の加西市等）からの奉納も少なからずあり、近世後期の史料として『多田康之家蔵　青山雄子和歌・書簡集』をまとめるうちに、加西郡内の有力者と札所寺院の僧侶との交流が明らかになった。

今回の研究の成果については、2013 年 12 月、加西市中央公民館での「地域歴史講座」で報告した（その様子は、同所のＨＰに掲載されている）。2014 年にも引き続き同所で報告会を予定している。将来的には、巡礼者の村々の現地調査を行い、一乗寺とそれぞれの地域を重ねるように分析して、著書としてまとめる計画である。

また、作成したデータの公開については、紙媒体での配布はせず、関係機関へデータで寄贈し、調査開始当初から支援をしていただいた加西市（教育委員会・中央図書館）に調書等を移管して、管理・公開する予定である。

一乗寺の巡礼札の文化財として価値に適正な評価が与えられるよう、今回のデータを基に、加西市と協力して、有形の登録文化財、あるいは民俗文化財として指定することを視野に入れて検討を進めている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　２件）

①幡鎌一弘「長谷部八朗編『「講」研究の可能性』」『宗教研究』第 88 巻第１輯、2014 年、159-163 頁。査読無

②幡鎌一弘「法華山一乗寺巡礼札からみる西国巡礼者の出身地域について」『宗教研究』375 号、2013 年、373-374 頁。査読無

〔学会発表〕（計　１件）

①幡鎌一弘「法華山一乗寺巡礼札からみる西国巡礼者の出身地域について」日本宗教学会第 71 回学術大会、皇学館大学、2012 年 9 月 9 日。

〔図書〕（計　１件）

①幡鎌一弘・森本桂子『多田康之家蔵　青山雄子和歌・書簡集』（自費出版）2012 年、1-69 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

幡鎌一弘（HATAKAMA　KAZUHIRO）

天理大学・付属おやさと研究所・教授

研究者番号：50271424

(3)連携研究者

稲城信子（INAGI　NOBUKO）

元興寺文化財研究所・特任研究員

研究者番号：50106712